Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-06-08

日本人大学生を対象とした英語の単音及び単語間の音のつながりの知覚と自己モニターを取り入れた教授法に関する研究

大塚，朝美

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2020-03-25
(Date of Publication)
2022-03-25
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第7650号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007650

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

（別紙様式 3）

論　文　要　旨

氏　名　大塚　朝美
専　攻　グローバル文化専攻・先端コミュニケーション論コース
指導教員氏名　山田玲子先生

論文題目
日本人大学生を対象とした英語の単音及び単語間の音のつながりの知覚と
自己モニターを取り入れた教授法に関する研究

論文要旨

本研究の目的は、日本語話者である大学生の英語発音学習に焦点を当て、特に英語の母音、子音、単語間の音のつながりの知覚習得について自己モニターを取り入れた指導の効果を大学の授業内と実験室内で行った実験結果をもとに明らかにすることにある。

第 1 章は、第二言語の音声習得における母語の影響について、大人の学習者と自己モニターについて、また母音や子音の知覚と知覚訓練効果について、単語間の音のつながりの知覚訓練の調査などの先行研究について述べ、本研究の目的を明らかにする。

第 2 章では、大学生の音声学習項目に対する意識調査について報告する。中学校の学習指導要領に掲げられている音声に関する言語材料は中学校の検定教科書にも盛り込まれており、学習者は中学校・高等学校の英語の授業で学ぶことになっている。しかしながら、大学入学以前に全員が同じことを学んでいるわけではなく、学生たちは様々な学習履歴をもって入学してくるのが実情である。そこで、大学の授業で音声学習を始める前に、これまで中学・高等学校で学んだと想定される学習項目について、どの程度理解し、身についていると感じでいるのかを初回の授業日に調査した。音声関連の科目を 2017 年度、2018 年度、2019 年度に受講した女子大学生 315 名を対象に、8 項目について 5 段階（1：「できない」から 5：「できる」）で自己評価を求めた結果、どの項目についても 2.23 から 2.62 の否定的な回答を示し、音声の基本的な学習項目習得について自信のない様子が明らかとなった。

第 3 章では、大学生の英語母音の知覚と授業内で実施した音素の知覚訓練効果について論じる。協力者は 2017 年度から 3 年間に授業を受講した 268 名の女子大学生であり、訓練については、自らの発音を録音して自己モニターするグループ（Group SM; Self-monitoring）と発音の録音はせず、モデル音のみを聞き直すグループ（Group L: Listening）に分けて調査した。対象の母音は R 音性母音を含む 20 の母音であり、事前テストの結果をもとに混同行列を作成して、母音知覚の混同の傾向を分析した。その結果、/ɚ/を/ɑɚ/と混同する割合が最も多く、続いて/ɔɚ/を/oʊ/と混同する率が高いことが明らかとなった。また、事前・事後のテスト結果について、協力者を事前テスト結果をもとに 2 レベル（上位群、下位群）に分けて分析した。その結果、2 グループともに母音について一定の指導効果が認められ、特に下位群の Group L の学習者に効果的であることが分かった。

第 4 章では、前章の母音指導後に引き続き行った子音の訓練効果について述べる。協力者は母音と同じく 268 名の女子大学生であり、Group SM と Group L に分けて訓練を行った。調査対象の子音は日本語話者が苦手とする音素対立 7 種類（(/f-h/, /v-b/, /θ-s/, /ð-z/, /ʃ-s/, /n-ŋ/, /r-l/）に絞り、訓練前後にテストを行い効果を測った。先行研究でも指摘されている通り、もっとも知覚の困難な組み合わせは/r-//l/であり、訓練後もその結果は変わらなかった。しかしながら、事前・事後テストの結果から、子音についても一定の訓練効果が認められ、母音と同じく今回の訓練内容は下位群の学習者に効果的であることが分かった。

第 5 章では、単語間の連結、脱落、同化の 3 種類の音のつながりついて授業内と実験室内で実施した知覚訓練効果について述べる。授業内実験の協力者は 2017 年度と 2018 年度に授業を受講した女子大学生 161 名、実験室内実験の協力者は 16 名である。音のつながりが起こる単語を含む文の書き取りとそれらの単語を単独に聞き取るテストを行い、訓練後にその効果を調べた。授業内実験では、テスト時期（事前・事後）とレベル（下位群・上位群）の主効果が有意であった。実験室実験においては、グループ、テスト時期、レベルの全てにおいて主効果が有意であり、音のつながりについても訓練効果が確認できた。フレーズの聞き取りと単語の聞き取りを比較した結果、実験室内ではフレーズの聞き取りが有意に伸びており、単語の正答率に近づいていることが示された。

第 6 章では、単語間の音のつながりの中の連結のみに注目し、授業内と実験室内で知覚訓練を行った結果を分析し、考察する。協力者は 2019 年度の秋学期に授業を受講した 50 名、実験室内では英語を専攻しない 8 名の大学生であり、授業内は約 90 分、実験室内では約 3 時間の訓練を受けた。テストは 2 単語の連結を判断する連結有無判断問題、連結が起こる単語を含む文の空所補充問題（フレーズ課題）、そして空所補充に使用した単語の書き取り（単語課題）であった。事前・事後テストの結果から、授業内、実験室内ともに連結有無判断課題については指導効果が示された。フレーズと単語の聞き取りの比較では、授業内指導の効果が示唆されたが、実験室内では有意差は確認できなかった。

第 7 章では、本研究の目的にそってこれまでの実験結果と考察をまとめて総合的に考察する。また、自己モニターを取り入れた訓練効果について述べ、今後の大学での音声指導への提案を述べる。

[課程博士用]

論文審査の結果の要旨

氏　　名	大塚　朝美		
論　文　題　目	日本人大学生を対象とした英語の単音及び単語間の音のつながりの知覚と自己モニターを取り入れた教授法に関する研究		
判　　定	(合　格)　・　不　合　格		
論文チェックソフトによる確認	☑ 確認 ☐ 未確認　理由：		
審査委員	区　分	職　名	氏　　名
	委員長	客員教授	内海　章
	委　員	客員教授	山田　玲子
	委　員	甲南大学国際言語文化センター教授	伊庭　緑
	委　員		印
	委　員		印

要　　旨

別紙のとおり

本学位論文は、日本人大学生の英語運用力を高めるための効果的な指導法を探求する中で、大学生の英語の母音、子音、音のつながりの聴取力について、自分の発音を録音してモデル音声と聞き比べる自己モニターステップを取り入れた指導方法と、モデル音声を聴取することに終始する指導方法を比較したものである。その際、大学の授業内での指導を行ったデータと、それと同等の訓練を実験室内で統制のとれた状態で行ったデータの双方から検討している。

第 1 章で背景となる先行研究の解説と、本研究の目的を述べた後、第 2 章では大学生の音声学習を複数の要素に細分化した項目について意識調査した結果を報告している。その結果、現在（2017 年度~2019 年度）の大学生は音声項目の習得について「できていない」という否定的な回答を示し、聞き取り、発音に自信を持っていない様子が明らかになった。

第 3 章、第 4 章では、授業内で英語の母音、子音の知覚訓練を行い（各実験 315 名、268 名）、自己モニターを行うグループ（自己モニターグループ）と、自己モニターを行わずモデル音声のみを聞くグループ（聴取のみグループ）に分け、2 つのグループの訓練前後の知覚テストの正答率を求め、分析した。その際、訓練前のテストの正答率で上位群と下位群に分け、聴取力レベルも要因として分析した。訓練前テストの結果から、数十年前から先行研究で報告されてきた日本語母語話者が困難とする単音の区別の成績が現在でも低いことに加え、R 音性母音との混同もあることが明らかになった。訓練前後の正答率、および訓練前から訓練後への正答率の上昇値を従属変数とした分析から、自己モニターグループ、聴取のみグループともに訓練効果があること、上位群ではグループ間の差はないが、下位群では聴取のみグループの方が訓練効果が高いことが示された。

第 5 章では、単語間の連結、脱落、同化の 3 種類の音のつながりがあるフレーズの聴取成績について、第 3，4 章と同様の枠組みで授業内 161 名、実験室実験 16 名を対象として訓練効果を測定している。また、基礎データとして単語単独で呈示した場合の正答率も測定した。その結果、単語単独で呈示すると聞き取れるが、音のつながりがあるフレーズ内で呈示すると聴取の正答率が 30 ポイント程度下がることが示された。訓練により授業内、実験室内共に正答率が上昇したが、グループによる顕著な差はなかった。

第 6 章では、第 5 章で誤りや訓練効果が顕著だった連結のみを対象とし、授業内（50 名）と実験室実験（8 名）を行った。テストでは 2 単語間の連結の有無を判断する連結有無判断問題、連結が起こる単語を含む文の空所補充問題（フレーズ課題）、空所補充に使用した単語の書き取り（単語課題）を行い、訓練では連結音声を使った訓練を行った。授業内群では、すべてのテストで訓練後の正答率が訓練前より有意に上昇したが訓練課題による差はなかった。実験室実験グループでは連結有無判断課題のみ有意に上昇した。

第 7 章では、全ての結果から、教育現場で肯定的に受け入れられている自己モニターを取り入れた訓練が必ずしも全員に有効ではないこと、特に英語力の低い学生では自分自身の発音を聴取してモデル音声と比較するより、モデル音声のみを聴取する方が指導効果が高いことを示し、その理由として英語力の低い学生は発音を聞き比べても、そもそも聴取力がついていないため自分の発音のどこが悪かったか判断できないことによる可能性をあげており、実際、自分の発音の判定は、教員が行った判定と一致しないこともデータで示している。一方、英語力が比較的高い学生は自己モニターの効果が見えており、レベルによって指導法を検討する必要性を述べている。

本学位論文は、英語教育の現場で効果がある手法として使われている「自己モニター」が、必ずしも効果がないこと、効果は英語力に依存し、英語力が低いと効果がない可能性を示したものである。その理由についても明確な考察がなされている。さらに、実験では多数の協力者による授業内で取得したデータと、人数は少ないが厳密に統制された実験室実験のデータの双方を実施している。これらのことから、本学位論文は新規な知見を確実なデータで証明したといえる。一方、対象とした大学生の英語力が全体的に低いことから、より英語力が高い学生では自己モニターの高い効果がみられる可能性があること、単音、音のつながり以外の観点も対象として興味深いこと、他の言語の学習方法とのなど、発展性も期待できる。各実験は緻密に計画され、例えば音のつながりの聴取では、つながっていない単語単独での聴取をコントロールとして比較し、その差が正答率（%）で 30 ポイント程度あることを示し、自分自身の発音評価能力については、自己評価と教員による評価を比較し、一致しないことを示している。これらのことから、本学位論文は外国語教育実践面、学術面の双方で重要な知見となる価値ある論文と高く評価できる。本論文に関連する査読付き論文も公開され、国際会議を含む複数回の口頭発表の実績も積んでいる。

よって、学位申請者の大塚朝美は、博士（学術）の学位を得る資格があると認める。

（以上）